

## ただいま 開催中 第1回企画展

### 水沢の名医高野長閑の本棚

#### ～高野家に伝わる資料より～

現在、当記念館では令和8年度第1回企画展「水沢の名医高野長閑の本棚～高野家に伝わる資料より～」を8月23日(日)まで開催しております。

高野長英の許嫁(いいなずけ)千越(ちお)が後に長英の養女となります。千越の娘能恵(のえ)の婿として高野家に迎えられたのが、長閑です。平泉村(現在の平泉町)の佐藤寛蔵の次男で、始めは玄貞(げんてい)と名乗っていました。



弘化3(1846)年頃、江戸に医学の修行に向かい、嘉永5(1852)年に水沢に戻り、開業しました。外科医として頭角を現し、大名に仕える医師、御典医(御医師)の列に入り玄斎と改名、慶応2(1866)年には御奉薬次席(ごぼうやくじせき)に出世し、長閑(ちょうかん)と改名しました。戊辰戦争の白河の戦いでは、命を受け軍に従い、負傷者の治療に当たりました。

明治に入り、胆沢県庁から縣医に任命され、種痘所幹事を歴任し、退職後は内科外科に問わず地域医療に専念し、治療を待つ患

者が毎日門前に立ち並んでいたといえます。身分や収入に関わらず、分け隔てなく診療したと伝えられています。



### 高野長英の最後を江戸で聞く

嘉永3(1850)年、江戸で医学の修行中だった玄貞(長閑)は、高野長英の最後を耳にします。それを書状に記し、親戚の小幡源之助(おぼたげんのすけ)に宛てて送っています。

### 実は華岡家に入門していた？

高野家に伝わる医学書のなかに、『花岡家極秘 完』という本があります。その中には、江戸の医者花岡泰潤の門人である胆沢郡水沢の高野長閑という一文があります。また、高野長閑の墓碑にも、同様の記述がみられます。華岡泰潤という人物は、華岡青洲の関係者や門人であった可能性も考えられます。

※華岡青洲(1760～1835)近世日本の外科医療を革新し、発展させた医師。紀伊の人。全身麻酔薬「麻沸散」(通仙散)を開発し、文化元年(1804)乳がんの手術に成功しました。

### 長閑が読んだ医学書

○甲賀通元校、望月三英重訂『古今方彙』

○張仲景著『金匱要略』

○張仲景著『傷寒論』

○本間玄調著『瘍科秘録』 乾・坤

【参考資料】「令和8年度第1回企画展パンフレット」(高野長英記念館発行)